

社会福祉士養成の学部教育における 学生の死生観に関する意識調査

村 上 信^{*1} 佐 藤 真由美^{*2}
宮 下 榮 子^{*3} 濱 野 強^{*4}
藤 澤 由 和^{*5}

1. はじめに

近年、社会福祉士養成教育においては、倫理観や死生観の構築の必要性が高まっている。その背景は、近年の制度変遷からも明らかであり、2006年より介護保険制度に重度化対応加算・看取り介護加算が新設されたのに伴い、介護保険施設でも介護報酬加算の算定要件の一つに看取り指針の作成が必要とされている。これにより、近年では、看取りの理念を生かした指針作りと教育、ケアの実践が進められている。また、2007年には、「社会福祉士及び介護福祉士法の一部を改定する法律」の成立に伴い、「社会福祉士養成課程における教育内容の見直しについて」が示され、「求められる社会福祉士像」が明らかとなった。その中では、総合的、かつ包括的サービスを提供することの必要性、その在り方などに係る専門的知識を身につける事が求められている。さらには、2008年の「後期高齢者医療制度」の施行に伴い、終末期医療に関しても新たな制度が提案されている。このように、わが国が直面している高齢社会の医療制度・介護保険制度では、「終末期」「看取り期」というキーワードが明確に位置づけられてきた。

以上を踏まえると、これからの社会福祉士は、「社会」と「死」を結びつけることにより「生活の一部としての死」を認識する必要がある、そのためには社会福祉士養成教育の中で「生活の中の死」をしっかりと見据えることが可能となる授業実践が必要である。しかし、現時点では、理想とすべき社会福祉士像を達成するための終末期ケア教育を、どのような内容で、どのような方法で学習させるべきかという点について十分な議論が示されていない。さらには、その基礎的資料となる学生の死生観に対する現状認識についても十分に検証されていない。

^{*1}総合福祉学部 教授, ^{*2}社会福祉法人つばめ福祉会, ^{*3}新潟医療福祉大学社会福祉学部 講師
^{*4}島根大学プロジェクト研究推進機構 講師, ^{*5}静岡県立大学経営情報学部公共政策系 准教授

そこで、本研究では、学部学生を対象として死生観の認識に関するアンケート調査を実施し、今後の終末期ケアに関する学部教育を検討する上での基盤となる知見を提示することを目的とした。

2. 方法

(1) 調査方法

本研究では、平成23年7月にS大学の学生を対象として自記式のアンケート調査を実施した。なお、本調査は、無記名で実施し、調査への協力も本人の自由意思とした。その結果、調査では、119名の学生より回答を得た。

(2) 調査項目

死生観は、先行研究で信頼性、妥当性が示されている死生観尺度を用いた(平井、他2000)。本尺度は、死後の世界観(4項目)、死への恐怖・不安(4項目)、解放としての死(4項目)、死からの回避(4項目)、人生における目的意識(4項目)、死への関心(4項目)、寿命感(3項目)という7つの下位尺度から構成されている。学生には、「当てはまる」から「当てはまらない」の7つの選択肢より回答を求め、分析においては「当てはまる」を7点として「当てはまらない」が1点になるよう得点化した。その他の質問項目には、性別、学年、特定の宗教の信仰、1年以内の親しい人の死の経験、3月11日の東日本大震災をきっかけに死について考えるようになったかに関する項目より質問紙を作成した。

(3) 分析方法

死生観下位尺度と性別、特定の宗教の有無、親しい人の死に直面した経験の有無、東日本大震災をきっかけに死について考えるようになったか否かの2群比較では、Mann-Whitney検定を行った。なお、統計解析はIBM SPSS Statistics 20を使用した。

3. 結果

回答者の基本属性を表1に示した。男性34名(28.6%)、女性85名(71.4%)であり、学年では2年生が最も多く102名(85.7%)、続いて4年生7名(5.9%)、3年生6名(5.0%)、1年生4名(3.4%)の順であった。特定の宗教を信仰している者は、14名(11.8%)であり、1年以内に親しい人の死に直面した経験を有する者は、21名(17.6%)であった。また、大震災をきっかけに死について考えるようになったと回答した者は、97名(81.5%)であった。

表1 調査対象者の属性・特性

	度数	%
性別		
男性	34	28.6
女性	85	71.4
学年		
1年生	4	3.4
2年生	102	85.7
3年生	6	5.0
4年生	7	5.9
特定の宗教		
信仰している	14	11.8
信仰していない	104	87.4
無回答	1	0.8
1年以内の親しい人の死		
経験している	21	17.6
経験していない	98	82.4
大震災以降での死		
考えるようになった	97	81.5
考えるようにならない	21	17.6
無回答	1	0.8

死生観の項目別得点を表2に示した。4つの質問項目より構成されている「死後の世界観」「死への恐怖・不安」「解放としての死」「死からの回避」「人生における目的意識」「死への関心」の中では、「死への恐怖・不安」が最も平均値が高く(19.3±6.87点)、続いて「死後の世界観」(18.5±6.46点)、「死への関心」(16.1±5.68点)の順であった。

表2 死生観の項目別得点

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
死後の世界観	118	4	28	18.5	6.46
死への恐怖・不安	117	4	28	19.3	6.87
解放としての死	117	4	28	12.0	6.51
死からの回避	117	4	28	11.8	5.85
人生における目的意識	117	4	27	14.0	5.32
死への関心	115	4	28	16.1	5.68
寿命感	116	3	21	10.9	5.68

表3 回答者の属性・特性と死生観尺度

	死後の世界観		死への恐怖・不安		解放としての死		死からの回避		人生における目的意識		死への関心		寿命感	
	度数	有意確率	度数	有意確率	度数	有意確率	度数	有意確率	度数	有意確率	度数	有意確率	度数	有意確率
性別		0.78		0.41		0.19		0.25		0.80		0.33		0.61
男性	33	200	34	20.6	33	8.4	32	9.0	32	15.5	32	15.0	32	11.5
女性	85	19.2	83	20.3	84	12.6	85	12.2	85	14.5	83	16.6	84	11.1
特定の宗教		0.02		0.43		0.27		0.78		0.19		0.54		0.07
信仰している	14	23.5	14	23.5	14	8.5	14	14.3	14	15.6	14	15.5	13	15.0
信仰していない	103	19.0	102	19.6	102	12.5	102	11.6	102	14.5	102	16.4	102	10.9
親しい人の死		0.28		0.47		0.04		0.38		0.69		0.1		0.01
経験している	21	19.1	20	23.2	21	15.0	20	13.5	20	14.1	20	17.8	20	14.5
経験していない	97	19.5	97	20.0	96	10.8	97	11.5	97	14.8	95	15.9	96	10.0
震災後の死		0.14		0.01		0.06		<0.01		0.06		0.42		0.22
考えるようになった	96	19.5	95	21.6	96	12.6	96	12.5	96	15.0	95	16.1	96	11.6
考えるようにならない	21	18.0	21	17.4	20	6.6	20	5.6	20	12.3	19	17.2	19	8.0

性別と死生観下位項目との検討を行ったところ、有意な差を認めなかった。特定の宗教では、宗教を信仰している群は、宗教を信仰していない群に比べて「死後の世界観」の中央値が有意に高く、「寿命感」も有意傾向 ($0.1 < p < 0.05$) であるが高かった。親しい人の死では、経験している群は、経験していない群に比べて「解放としての死」「寿命感」の中央値が有意に高かった。震災後の死では、震災後に死を考えるようになった群は、考えるようになっていない群に比べて「死への恐怖・不安」「死からの回避」が有意に高く、有意傾向 ($0.1 < p < 0.05$) であるが「解放としての死」「人生における目的意識」が有意に高かった。

4. 考察

本研究では、社会福祉士養成教育における学生の死生観を明らかにするために調査を行った。看護師(石田、他 2007)や介護福祉士(宮下)を目指す学生を対象とした先行研究では、類似した試みが示されているが、社会福祉士を目指す学生を対象とした研究については非常に限られていることから、今後の教育内容を検討する上での基礎的知見として位置づけることが可能と考える。

宗教の信仰の有無と死生観下位尺度の検討より、「死後の世界観」に有意な差が示された。「死後の世界観」は、「死後の世界はあると思う」「世の中には「霊」や「たたり」があると思う」「死んでも魂は残ると思う」「人は死後、また生まれ変わると思う」という質問項目から構成されている。こうした視点は、魂や精神性の永続性という議論とも関係しており、宗教的視座を有する学生群において中央値が高い事は理解できる結果と言える。言い換えれば、他の学生では、死に直面する機会も少ない現状にあることから、「死」という事象の具体的な理解に至るのは困難であり、死後の世界観という視点にはほど遠い現状が考えられた。

また、親しい人の死に対する経験の有無と死生観下位尺度の検討より、「解放としての死」「寿命感」において有意な差が示された。前者は、「私は、死とはこの世の苦しみから解放されることだと思っている」「私は死をこの人生の重荷からの解放と思っている」「死は痛みと苦しみからの解放である」「死は魂の解放をもたらしてくれる」、後者は、「人の寿命はあらかじめ「決められている」と思う」「寿命は最初から決まっていると思う」「人の生死は目に見えない力(運命・神など)によって決められている」から構成されている。質問内容からも明らかな通り、どちらの下位尺度においても「死」に直面、または「死」を体験することにより、具体的な理解が可能となる内容から構成されている。すなわち、「死」を単なる事象(イベント)と受け止めるだけでなく、「死」をその人の人生の一部として理解すること(振り返ること)が「死」に直面することで初めて可能になったと推察される。

さらに、震災後に死について考えるようになったか否かと死生観下位尺度について検討を行ったところ、「死への恐怖・不安」「死からの回避」に有意な差が示された。「死への恐怖・

不安」は、「死ぬことがこわい」「自分が死ぬことを考えると、不安になる」「死は恐ろしいものだと思う」「私は死を非常に恐れている」の4項目、また、「死からの回避」は「私は死について考えることを避けている」「どんなことをしても死を考えることを避けたい」「私は死についての考えが思い浮かんでくると、いつもそれをはねのけようとする」「死は恐ろしいのであまり考えないようにしている」である。このように、どちらの下位尺度も、死に対しての直接的な認識を問う内容より構成されている。そうした中で統計的に有意な差が示された背景には、震災時の報道が影響を及ぼしていることが推察された。つまり、人々が津波から避難している報道、大規模な火災、遺体を収容している報道などが「死」を自身にも起こりうる身近な出来事として認識させたと考えられる。さらに、映像を通して自身がその状況に対してある種の同化をすることが可能であったことが影響していると考えられる。このように社会的なイベントは、学生の死生観の中でも死の恐怖や不安という側面に大きな影響を及ぼす一方で、恐怖や不安を過度に煽りすぎることのないよう、その情報源となる報道内容の妥当性を十分に精査した上で適切な理解を図ることが教育においても必要であると考えられる。

本研究の限界は、第一に調査の実施がS大学に限られていることがあげられる。今後は、同様に社会福祉士養成教育を行っている大学で実施をすることで、より知見の一般化を図りたいと考える。第二には、回答者が主に2年生であることから、年代の違いによる検討を行うことができなかった。今後は、1年生と4年生を比較するなど学年数が及ぼす影響についても検討を深める必要がある。第三には、本研究で設定した基本属性や宗教観、死の経験などによって下位尺度に差が示されなかった項目については、他の要因を加味した更なる分析が必要である。

4. おわりに

本研究では、学部の社会福祉士養成における終末期ケア教育のあり方を検討するための基礎的資料として、学生の死生観の認識について検討を行った。その結果、学生の死生観は、自身のライフイベントや震災などを始めとした社会的な事象により影響を受けることが明らかとなった。以上の知見を踏まえて、今後は、各下位尺度に影響を及ぼしている条件をふまえて具体的な教育内容や教材の検討を進め、効果的な教育方法の提起を図りたいと考えている。

謝辞

本研究は、平成23年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「大学の学部教育における終末期ケアに関する社会福祉士教育の実証的研究（研究代表者：村上信）」における研究成果の一部を取りまとめたものである。

参考文献

1. 平井啓、坂口幸弘、安部幸志、森川優子、柏木哲夫. 死生観に関する研究—死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証—. 死の臨床. 23. 71-76. 2000.
2. 石田順子、石田和子、神田清子. 看護学生の死生観に関する研究. 桐生短期大学紀要. 18. 109-115. 2007.
3. 宮下榮子. 介護福祉士養成教育における「介護観」構築のための「終末期介護」教育の実践報告—学生の意識調査による検証—. 新潟医療福祉学会誌. 9. 20-24. 2010.

Research on Attitudes Towards Death in the Training of Social Workers

MURAKAMI, Makoto

SATO, Mayumi

MIYASHITA, Eiko

HAMANO, Tsuyoshi

FUJISAWA, Yoshikazu

The aim of this study is to show the death attitude of the student in the training of social workers. A questionnaire survey was conducted in 2011, and then we got the data from 119 students. Our results implicate that the death attitude is likely to be influenced on the students' life event as well as social impact such as disaster. Further studies are needed to gather the similar data to get robust conclusions.